

巻頭のことば

田宮裕先生は、一九六八年三月に北海道大学法学部を退職された後、同年四月に立教大学法学部に着任され、九八年三月末日、三十年の長きにわたって勤められた法学部を定年退職されました。先生が法学部に着任された当時、当部は設立後十年も経たない発足期にありましたが、先生は研究および教育の両面にわたって若い学部的发展と充実に多大の貢献をなされました。またこの間、八三年四月からの二年間は、法学部長兼法学研究科委員長の任にあたられ、同時に立教学院評議員をつとめられるなど、行政においても学部と大学的发展のために大いに尽力されました。

先生の専門領域は申すまでもなく刑事訴訟法であり、周知のごとくその研究業績は刑法学界は言うにおよばず、日本の法学界全体において高い評価を受けておられます。一九六五年に公けにされた『捜査総説・強制捜査』を第一作として、『捜査の構造』（一九七一年）、『刑事訴訟とデュー・プロセス』（一九七二年）、『一事不再理の原則』（一九七八年）、『刑事手続とその運用』（一九九〇年）と続く四部作で最前線の刑事訴訟法学を展開され、その集大成として、名著『刑事訴訟法』（一九九二年）を刊行された他、夥しい数にのぼる著書、共編書、論文を発表された先生は、現在、日本の刑法学界の最高の権威者の一人として多くの研究者の尊敬を集めておられます。このことは私たち学部の同僚が常に誇りとするところでもありました。また、卓越した御研鑽に加えて、その温厚なお人柄のゆえもあり先生を敬う学生も数多く、先生の門下から沢山の若い刑事法の研究者が巣立っていきました。

学問上の御活動以外に、先生は一九七〇年から現在に至るまで日本刑法学会の理事を、そして一九九一年か

ら三年間、同学会の理事長をつとめられた他、一九八二年から四年間、そして一九九一年から現在に至るまで司法試験審査委員を、一九八八年からは法制審議会委員を担当されておられます。

先生が退職されたことにより私たちは一抹の寂しさを感じておりますが、他方これ以上に、先生のこれまでの御教導に対する深い感謝の気持でいっぱいです。私たち立教大学法学部教員一同は、先生が御健康に留意され、これからは名誉教授として私どもをお導き下さることを願いながら、敬意と感謝と親愛の念をこめ、ここに『立教法学』を先生の退職記念号として編み、献呈させて頂くことに致しました。

一九九八年三月

立教法学会会長 小林 公